

序

——リベラル帝国主義研究の先端——

馬路智仁

本書評企画は、2019年3月23日グローバルスタディーズ・国際シンポジウム（グローバル地域研究機構主催、於東京大学・伊藤国際学術研究センター）の一部として行った書評セッションの成果をまとめたものである。“The Deep Roots of Brexit? The Anglosphere in History”と題されたこのシンポジウムは、差し迫るブレグジットという現象を近代以降の長期的な歴史的パースペクティブの中に位置づけることを趣旨としたものである。この趣旨の下、同書評セッションではOnur Ulas Ince, *Colonial Capitalism and the Dilemmas of Liberalism* (Oxford: Oxford University Press, 2018) をめぐる討論を、学内外の三名の評者と同時に本書の著者を海外より招聘する形で行った。本書は、主としてジョン・ロック、エドモンド・バーク、そしてE.G.ウェイクフィールドの思想におけるリベラリズムと資本主義、帝国主義——中でも殖民主義 (settler colonialism) と呼ばれる事象——の絡まり合いを分析した独自かつきわめて示唆に富むモノグラフである。

1990年代後半以降、英語圏の政治思想史学界（より正確には、イギリスにおけるケンブリッジ大学・ロンドン大学連合とハーヴァード大学・シカゴ大学などアメリカにおける幾つかの大学を中心とする世界規模の思想史研究ネットワークということになるが）は、政治思想史学の帝国論的転回 (imperial turn) や国際論的転回 (international turn) を促進してきた。この学術的蓄積において一つの通奏低音を成しているのが、近代リベラリズムはいかなる仕方で帝国形成・発展と結びついてきたかという問いであり、またその問いの立て方に伏在するリベラリズムに対する批判的な（否定的な、ではない）眼差しである。勿論この背景には、人道的介入や「アメリカ帝国」という事象によって鼓吹されたりベラル帝国論の隆盛があったが、政治思想史の帝国論的・国際論的転回の理由はきわめて複合的であり、それに留まらない。

本書は、このような政治思想史研究の潮流における最新成果の一つである。その最大の特徴は、リベラル帝国主義研究の中に経済学的観点を持ち込み、植民地のある種暴力的な資本主義への転換とリベラリズムの複雑な緊張関係や接続を扱っている点にある。そこでは、マルクス主義の知見や（日本でもなじみ深い）C.B.マクファーソンの主張も援用される。加えて本書は、ウェイクフィールドという、ジョン・ステュアート・ミルに重大な影

響を与えたが長年忘却されてきた——ただし近年注目を集めつつある——19世紀のイギリス殖民主義者を俎上に載せている点でも注目に値する。本書はこうした分析を通して、近年「アングロスフィア」の名で表現される英語圏諸国が歴史上どのように形作られてきたかをめぐる一つの重要な側面を照らし出している。

書評執筆者は、上記書評セッションにおける評者とセッションの司会を担当した私、および書評へのリプライを送ってくれた本書著者によって構成されている。多忙な中で原稿を執筆して下さった評者と著者に深謝申し上げたい。なお本企画は、『相関社会科学』の歴史におけるほぼ初めての英語原稿であり、この試みの今後への影響は定かではないが、ともあれその点でも意義があろう。